

講義レジュメ

講 師 川村研治

内容・テーマ

環境問題と社会教育

期 日 平成29年8月21日

1992年のリオサミットに象徴されるように、90年代は地球規模の環境問題が各国首脳の重要な関心事だった。リオサミットから四半世紀が過ぎ、環境問題は悪化を続けているにもかかわらず、環境問題に対する関心は必ずしも高くはない。将来世代のために良い環境を遺すよりも目先の経済や生活を優先する1970年代以前の思考パターンに後戻りしたのだろうか？ おそらく、そうではないだろう。そのような考えをする人が皆無とは言わないが少数派であると信じたい。

今日、環境問題はあまりにも身近なものとなった。公害や自然破壊などに代表される環境問題では当事者が限定され、多くの人は環境問題との間に距離があり、問題を第三者的な立場で見ることがもできた。現在においては、全ての人が環境問題の当事者となった。酷暑や豪雨など極端な気象災害は二酸化炭素など温室効果ガスが地球を暖めた結果である可能性が高いと言われている。クロマグロやウナギなどが絶滅の危機に瀕しているのは乱獲に原因があることは疑いようがない。シカやイノシシなど野生鳥獣問題は耕作放棄地の拡大や里山が利用されなくなったことと関係が深いと言われている。

近年、環境問題が私たちの生活様式や経済・社会のありようと直結し、複雑に関係し合っていることが目に見えやすくなった。人類の「業」を直視し、絡み合った環境・社会・経済の糸を解きほぐす覚悟を持たない限り、環境問題に解決の道はない。

環境問題を乗り越え持続可能な社会を築く上で、社会教育はどのような貢献ができるだろうか。今回、演習を通して問題を直視し、自分たちにできることを考え、他者と合意を作り、協働を生み出す具体的な技法を学ぶ。

〔参考文献〕

- 見田宗介著『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来』岩波新書、1996
- 佐倉統著『現代思想としての環境問題—脳と遺伝子の共生』中公新書、1992